

識別番号	P 1 3
研究課題	グローバル化時代のラテンアメリカ女性演劇の展開 ーグローバル化時代のラテンアメリカ地域研究と教育ー
研究代表者	マウロ・ネーヴェス（イベロアメリカ研究所・外国語学部ポルトガル語学科）
共同研究者	長谷川ニナ、幡谷則子、大越翼、谷洋之、吉川恵美子（以上、イベロアメリカ研究所・外国語学部イスパニア語学科）、子安昭子、三田千代子、田村梨花、エレナ・トイダ、アナ・エリーザ・ヤマグチ、矢澤達宏（以上、イベロアメリカ研究所・外国語学部ポルトガル語学科）、岸川毅（イベロアメリカ研究所・国際関係副専攻）
Summary	The purpose of this research is to analyze the situation and the background of the recent women's theater in Latin America. Three outstanding points are observed: 1)The influence of the Magdalena Project, a worldwide network of women in theater; 2)The important role played by Eugenio Barba, an Italian theatrical scholar; 3)The theory proposed by Augusto Boal, the most important reformer in theater in the 20th century Latin America.

1. 研究の目的・背景

国際演劇協会（ITI/UNESCO 日本センター）が刊行している「年鑑」（1972 年創刊）に 10 年ほど前からラテンアメリカ演劇事情を書いている。20 を超える国々の 1 年間の演劇状況を大きくつかんでいく作業の中で、ラテンアメリカの女性演劇人たちが非常に元気であることに気づいた。女性劇作家、女性演劇集団、女性演劇フェスティバルについての情報がそこそこにあふれていた。ラテンアメリカの女性演劇人たちは今、どのような演劇を、何のために創っているのかを知りたいと思った。これが研究の動機である。

現在のラテンアメリカ女性演劇を概観してすぐ分かる特質は 2 つある。まず第一に、新しい演劇ジャンルである「パフォーマンス」を好んで取り入れていることである。第二に、社会的弱者の女性を芝居づくりに巻き込むことで、演劇を社会行動の方法にできると考えている点である。なぜ従来型の演劇ではなくパフォーマンスなのか。なぜ鑑賞型の演劇ではなく社会行動なのか。この特質を考察していくことで、女性演劇の実際が、さらにはラテンアメリカ独自の演劇の様態が見えてくるのではないか。

また、ラテンアメリカ女性演劇人のフットワークの軽さにも驚かされた。国境を越えて演劇フェスティバルが開催される。スペイン語とポルトガル語でつながる国々が行き来するのは自然のことなのだが、こうした演劇集会には欧米からも多くの女性たちが参加している。女性演劇人たちは国際的に連帯しているのだということが見えてきた。なぜ国際連携が可能になったのか、国際連携は女性たちの演劇にどのような意味を持っているのか。

ダイナミズムに富むこの演劇現象を追うのが本研究の目的である。

2. 研究の経緯

- ◆2003 年 スペイン・カディス市における「イベロアメリカ演劇祭」付帯イベント「女性演劇集会」(Encuentro de mujeres de Iberoamérica)調査。
- ◆2005 年 日本ラテンアメリカ学会第 26 回定期大会にてラテンアメリカの女性演劇について報告。

- ◆2006年 論文「コロンビアの女性劇団「ラ・マスカラ」の試みと〈マグダレーナ・プロジェクト〉」、『學苑』No.787、2006年、26-38ページ。
- ◆2010年3月 台湾・台北市の〈マグダレーナ・プロジェクト〉調査。
- ◆2010年8月 メキシコ、グアナフアト市にてオディン・シアターのワークショップに参加。
- ◆2010年11月 コロンビア、ボゴタ市にて女性演劇フェスティバル調査。

3. 研究の成果

①ラテンアメリカにおける女性演劇の活性化に決定的な役割を果たしたのは〈マグダレーナ・プロジェクト〉である。

〈マグダレーナ・プロジェクト〉は1980年代半ばのイギリスに誕生した女性演劇人国際ネットワークである。このネットワークに参加することでラテンアメリカの女性演劇が活気づいて行く経緯はポスターに提示した年譜からも明らかである。

②ラテンアメリカ民衆演劇／女性演劇のキーパーソンはエウジェニオ・バルバである。

イタリア出身のバルバ(1936~)は究極の身体表現を追求したポーランドの気鋭グロトフスキーの弟子として出発した。インドや日本をはじめとする東洋演劇の身体性を追求し、“演劇人類学”を提唱した演出家である。バルバは1976年のベネズエラを皮切りに現在まで、自らが主催する劇団オディン・シアターのメンバーを伴い、毎年、ラテンアメリカ各地で様々な演劇実験を重ねて来た。ラテンアメリカを代表する優れた民衆演劇集団の多くがバルバの強い影響を受けている。

女性演劇人ネットワーク〈マグダレーナ・プロジェクト〉の中で主導的な役割を担ってきた女性たちの多くはオディン・シアターのメンバーであることから、現在のラテンアメリカ女性演劇のキーパーソンはバルバであると考えられる。

③ラテンアメリカにおける演劇コンセプト転換の先駆者はアウグスト・ボアールであった。そのコンセプトを女性演劇人たちは引き継いでいる。

ブラジルのアウグスト・ボアール(1931~2009)は演劇を民衆の新しい言語として提唱した。その「被抑圧者の演劇」Teatro do Oprimidoの理論は20世紀後半の第3世界演劇に決定的な影響を与えた。1971年以来、ボアールはこの理論をさまざまな手法で発展させてきた。それは「新聞演劇」「フォーラム演劇」「見えない演劇」「立法演劇」などの名称で知られるが、“見る”演劇から“参加する”演劇への転換が骨子となっている。今日、ラテンアメリカの女性演劇人たちは“被抑圧”の立場に置かれてきた周縁社会の女たちにその演劇言語を伝達している。現実を自分の言葉で表現することの意義と楽しさに目覚めた女たちによるアマチュア演劇運動には多くの可能性が秘められている。草の根から社会が変わることを女たちは確信している。

4. 今後の課題

年ごとに活発になっていく〈マグダレーナ・プロジェクト〉の動向を見守るとともに、「キーパーソン」と位置づけたエウジェニオ・バルバの今日までの仕事の内容を明らかにしていくこと。また、ラテンアメリカ演劇の民衆性の基礎を作ったアウグスト・ボアールの作業内容も女性演劇との関連性のなかで検討して行く。